

子どもの〈描く行為〉が起こす〈生の共有〉とその分析

磯部 錦司

(宝仙学園短期大学)

1. 研究の目的

本研究は、造形活動の中での「人との、人との」関係に見られる「包括的、円環的な関係論」と、表現者相互の「コミュニケーション」を課題に、子どもの造形活動を分析することを試みた一連の研究である。これまでの研究では、「平面造形において発生するコラボレーションについての一考察」(「美術教育学」第24号)、「発生的コラボレーションの実践」(「宝仙学園短期大学研究紀要」第28巻)において、目的や前提としてでなく、表現者相互の共同性が、「描くこと」の中で必然的に起こるとするならば、それはどのようなものであるのかを実践事例から述べてきた。本事例では、その展開と子どもの活動内容について分析する。

2. 研究の方法

次の実践から、連続した子どもの活動場面を映像で記録し、それらの事例の中で、表現者相互が共に描く行為を起こしていく展開と、その活動内容を分析した。

共通の生活体験を持つ生活集団において、それぞれの生活場面の中で、一枚の大きな紙を敷き、絵の具、筆を用意する。何を描くのかは伝えず、そこに描いてもよいことのみ伝える。

○事例1

実施園：東村山市立第八保育園、2001年5月

対象児：5歳児 24名

状況：お泊り保育の翌日、保育室全体に白い和紙(90cm×21m)を敷きつめ、墨汁と筆を用意する。

○事例2

実施園：東村山市立第八保育園、2002年7月

対象児：5歳児 22名

状況：園庭の菜園で育てた野菜を収穫し食べた後、その菜園の周りに白画紙(90×2m)を4枚敷き、水性絵の具、筆を用意する。紙が飽和状態になったところで紙を取り替えていく。

○事例3

実施園：キンダーガーデン“Ahven”(デンマーク・ブラネ市)

対象児：3歳～5歳児 34名

状況：異年齢による散歩で、日常に訪れる広場に和紙(90cm×50m)を敷き、水生絵の具、筆を用意する。

3. 展開と活動の内容

<展開>

○事例1

自分の場所を見つけ描き出す。凡その子が、お泊り保育で出会ったものや人やそのできごとを具体的に描き出す。キャラクターや、生活の中の具体的なものを描く子もいる。やがて、お泊り保育で行った洞窟と他人のそれとをつなげたり、そこに新たな登場人物が現れ互いで物語りを話しながらか描く等、体験や出来事を共に描き合う場面が生まれ、その造形を基に空想のイメージを作り描き合う場面が見られる。やがて、具体的な形の上に、イメージとは関係のない垂らす、重ねる等の活動へ変化し、紙からお互いの体に描き出す。

○事例2

一枚目では、それぞれが、自分の場所を見つけ、菜園で食べたキュウリやトマト、水や苗など具体的なものを描き出す。グループによっては、それぞれの領域を一人の子が分担し描き出す。菜園で食べたり遊んでいる子が徐々に参加する。

2～3枚目では、自分の領域から出て、描き出す。描いたものからお互いで物語をつくったり、他人の造形に描き加えたりなど、具体的な事物から物語や架空のイメージを表現する活動が生まれる。

4枚目では、絵の具を垂らし合ったり、互いの形を重ねたり、つなげたり、具体的な形は消え、4枚目以降では、他人の体に塗り合う事例が見られる。

○事例3

自分の場所でそれぞれが描き出す。垂らしたり、カップを使ったり、様々な行為を試す姿がある。具体的な事物を描く子もいるがその人数は少ない。一緒に風景や共通のものを描いたり、自分の場所を離れ、長い線で線路をつくり、そこに描き合い、その絵の上を歩くなどの姿が生まれる。画面が飽和状態になり、終了。

〈活動の流れと内容〉

3つの事例に共通して見られる活動は次のようである。

- それぞれが自分の場所を見付け具体的な事物や、生活のできごとを描きだす。
 - 自分の場所で様々な行為を試しながら描く。
 - ・絵の具を垂らして表す。
 - ・手に絵の具を着けて手形で表す
 - ・筆の直線的な線によって表す
 - ・筆の曲線的な線によって表す
 - ・丸や抽象的な閉じた形によって表す
 - ・円や曲線的な形を組合せて表す
 - ・円や曲線的な形を重ねて表す
 - 自分の場所から離れ余白を見付け描きだす
 - 他人の線や形とつなげて描きだす
 - 前の形を基に、物語と一緒に言葉で作りながら描き出す。
 - 相互が共通のイメージを言葉にして描き合う。
 - 他人の線の上に重ねて描きだす
 - ・他人の描いた色の上に絵の具を垂らす
 - ・他人の形に交わるように形を描く
 - 具体的な形が消え、同じ行為で描き合うなど、行為自体を楽しみ描く
 - ・交互に絵の具を垂らし合いながら描く
 - ・足に絵の具を塗り歩きながら描く
 - ・体に塗り合う
- 紙が飽和状態になり終了する。

4. 考察

(1) 要因について

導入では、それぞれの場所で、具体的な事物や出来事を描いたり、行為を試す活動が見られるが、共に描く場面は見られない。やがて、次のような環境や関係から、線をつなげたり、物語を作り合い描くなどしながら、造形行為をとおした「コミュニケーション」や「感覚の共有」において、共に描く行為が生まれている。

○時間・場所の保障

- ・誰もがここなら自由に描けるという「場所」
- ・一人ひとりが、描きたくなるまで材料（紙、絵の具）と向き合える「時間」

○あいまいな関係性（境界、色形の所有）

- ・表現者相互があいまいに関わる「境界のない画面」
- ・私の線や形や色でもあり、他人の線や形や色でもある
「所有のあいまいな線・形・色」

○自分の「居場所」

- ・全体の画面の中、自分の場所（居場所）をつくり、そ

の場所でそれぞれが描きだし、その場所から活動を広がっていく。

(2) 「コミュニケーション」や「感覚の共有」としてこれらの事例では、始めから表現者相互が感覚を共有させようとか、共通のイメージを持って描こうとするのではなく、初めに自分の場所で自分の造形を楽しむうちに、線や形をつなげたり、物語をお互いにつくって描いたり、他人の形の上に描いたり、会話するように絵の具を垂らし合ったり、筆で描き合ったりしながら、破壊と構築を繰り返し、結果として、描くことでコミュニケーションが生まれ、共に描くことで色や形を共有し、感覚を共有し合おうとするできごとが生まれてきた。ここでは、共通のイメージを持って、そのイメージに向けて形をつくらうとする共同性は、部分的にししか見られず、結果的には、子どもたちは、共に描く行為において、コミュニケーションや感覚を共有しようとする「行為」そのものを楽しむ姿にいたった。つまり、これらの事例に見るように、ここでの共同性は、共通のイメージを形にしていくことより、共に描く過程の「行為」そのものに、子どもたちは描くことの目的を持っている。

(3) 主題性との関わりにおいて

さらに、主題との関わりの中で、共同性がどのように起こり、造形活動が展開していくのか検討してみたい。

お泊り保育の事例や、菜園の事例に見るように、「共通の生活体験の中で共有した喜びや感動、出来事を、同じ画面の中で、同じイメージを持って共有し表そうとする姿」が見られる。共通の生活体験の中の共有した喜びや感動によって、個々の表現は他者の表現と共有され、同じイメージを生み出そうとする活動へと転換していく場面が、子どもの活動の選択権としてあるということが考えられる。この場面では、共に生活した体験によって、共に描くことが起きている。

しかし、始めはイメージを持って描いているが、やがて行為自体を楽しむことに夢中になっていく姿がある。その様子は、時間が経過するほど、「コミュニケーション」や「感覚を共有する」行為へ変化する。イメージにこだわって描き続ける子どもも多いが、個人によってその現れは異なっている。全体では、具体的な事物から、空想やイメージの世界へ、さらには行為自体を楽しむ抽象的な造形へと変化している。